

わが国の綿糸紡績、草創期の苦闘

幕末から明治初期にかけて、わが国の綿糸、綿布の輸入量は全輸入量に対して大きな割合を占めており、これを減らすことが急務であった。これを解決する為に官民挙げて努力したが、以下の始祖三紡績(A)から政府が機械の代金を立て替える方式(D)に示すように苦闘の連続であった。機械設備は外国製であったが、技術や運営の指導の為に外国人を招聘しなかったことが特徴である。

(A) 始祖三紡績

・鹿児島紡績所 (I-5 日本機械紡績の嚆矢・鹿児島紡績所 パネル参照)

・堺紡績所

プラット社の技術者から不十分ながら訓練を受けた薩摩藩の石河正竜が、堺に英国ヒギンス社から購入した 2000 錘のミュール精紡機を据え付け、明治 3 (1871) 年 12 月から連続運転、動力は蒸気機関。

・鹿島紡績所

明治 5 (1872) 年 鹿島万平が、東京滝野川に鹿島紡績所設立、ヒギンス社製ミュール精紡機、144 錘建て 4 基、水車動力。失敗。政府が紡績会社設立に関与する方式として、次の(B)から(D)までの三つの方式があった。

(B) 官営模範工場建設、払下げ方式 — 政府がミュール精紡機 2000 錘 2 組輸入、2 ヶ所に設置。

・愛知紡績所 (愛知県額田郡大平村、現在の岡崎市大平町)

明治 14 (1881) 年 12 月完成、

a) 平均して赤字、水量不足に悩まされる、

b) 同 19 年篠田直方に払下げ、一応黒字になるが同 29 年火災で解散

(II-8 官営の第一紡績所「愛知紡績所」パネル参照)

・広島紡績所 (広島県安芸郡上瀬野村、現在の広島市安芸区上瀬野町)

明治 16 年 7 月完成、

a) 土族授産のため県が建設したミュール精紡機 3000 錘工場で出発、更に官営新工場払下げでミュール精紡機 5000 錘工場に。

b) 技能未熟、水力不足等で業績不振。土族授産貸下金 20 万円余の棄損、蒸気機関、リング精紡機 3000 錘新設で安定するが、5 千を超す土族株主の生活を支える配当は不可能で、同 35 年に解散。

(C) 政府が 23 万円を投じ英国より 2000 錘ミュール精紡機 10 式を購入

有力綿作地帯によびかけて、無利子 10 年年賦という有利な条件で払下

げ、紡績工場を経営させる。世にこれを十基紡という。三重、静岡各県の分の詳細を示す(愛知、岐阜はなし)。

・三重紡績所(伊藤傳七)明治 15 年 6 月開業

a) 初 2 年次赤字、3 年目に黒字となるが機械代金返済できず。

b) 同 19 年株式会社に改組、ミュール精紡機 7000 錘、リング精紡機 3440 錘の新工場同 21 年スタート、以後順調に成長。大正 3 (1914) 年大阪紡績と合併し東洋紡績株式会社となる。

・島田紡績所(鈴木久一郎)明治 17 年 6 月開業

a) 鈴木個人の事業。水路、水車場工事困難で開業遅れ、建設費も嵩み、非常な苦境。同 20 年頃より紡績業全般の好況、同 23 年頃リング精紡機 1704 錘増設。同 27 年火災も乗り越え順調に発展。

・遠州紡績会社 明治 17 年 11 月開業

a) 水路開削困難、機械火災等で開業出来ず、

b) 同 18、19 年は赤字、20 年 7 月頃から二交代制で安定するが業績は不振。同 26 年水路破損水車場崩壊を機に解散。

その他の工場は次の通り、経過は略す。玉島(岡山)、下村(岡山)、市川(山長崎(長崎)、野澤(栃木)、豊井(奈良)、佐賀(未開業)

(D) 政府が機械の代金を立替える方式

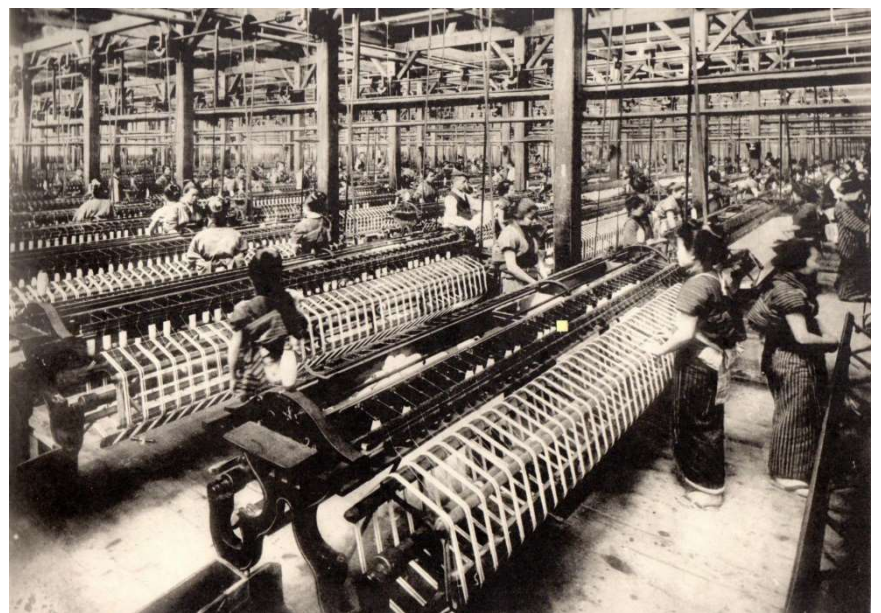
買い入れた機械はいずれもミュール精紡機 2000 錘

・名古屋紡績会社

最初のミュール精紡機 2000 錘から明治 32 年にリング精紡機 3 万錘まで発展、同 38 年に三重紡績株式会社へ合併。

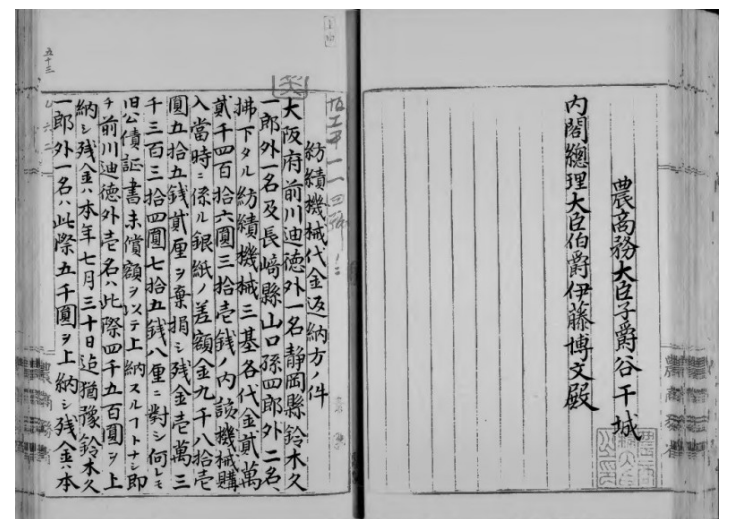
この他に桑原紡績所、宮城紡績会社があるが省略。

大阪紡績の工場内部



「図説日本史通覧」p238 帝国書院

島田紡績(鈴木久一郎)が払下紡績器械代金を返納したことを示す文書



JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A14110120000、公文雑纂・明治二十年・第二十五巻・文部省、農商務省(国立公文書館)